
とある事務所のテトテテン（仮題）

ともみつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある事務所のテトテテン（仮題）

【Nコード】

N2971F

【作者名】

ともみつ

【あらすじ】

世界は開かれ、地球には異種生命体が人類の世界へ入り込んだ。さまざまな問題を解決し、世界を安定に導くために、今日も儲ける事務所と儲けない相談所が、問題解決へ走り出す。

プロローグ1 夜吹相談所（前書き）

今は一つだけですが、二つの事務所をそれぞれの視点で描くストーリーです。明確な先の無い作品ですので、ファンタジーなのかコメディなのか、今の段階ではあやふやですが、とりあえずは、バトルありのファンタジー系作品です。読んでいただければ幸いです。

ブローグ1　～夜吹相談所～

「なっ、何じゃこりやああああっ！」

アフロは外せない主義。

女に手は上げない主義。

朝食は目玉焼き（両面焼き・コシヨウ限定）主義。

コーヒーに角砂糖三個とミルクは入れる主義。

お金持ちは持ち上げる主義。

パンツは使い捨て主義。

午後八時には仕事を止め、残業はしない主義。

マッチは常に三本着火主義（ライターは常時最大火力主義）。

占い絶対信仰主義。

決まり事は大抵破る主義。

の多くの主に偏った主義を持ち、水虫、虫歯、痔の虫を飼い慣らし、仕事はスーツにソフト帽、ノーネクタイ、寝間着はピンクパジャマと抱き枕、タバコはメンソール入り、極度の乗り物酔い、週一に一人でケンタッキイーで店内食事、新聞はテレビ欄と四コマしか読まない、好きなビデオは最低三回はレンタルの買取なし。などの主義なのか子供なのか、よく分からないこだわりを持つ男、夜吹^{やぶき}双剣^{そうけん}。

今日もまた、鏡の前で己の姿に酔いしれる——はずだった。

「なっ、何じゃこりやああああっ！」

向こう三件両隣の四方八方を時代の流れとともに、高層ビル化に日照権を剥奪された、築四十三年の二階建てボロビルながらも不動産価値は意外と上昇している、二階は倉庫、一階は夜吹総合生体環境順応解決相談所、通称夜吹相談所であり、その所長を務める双剣は、鏡を前に髪を掻き揚げた櫛を持つ手が、固まった顔色は、絶望。「何さ？ その年代はみんなそう言わないとすまないもんなん？　つてか、何で二回ゆーたん？」

日中は目が悪くなるから仕事はしない。

猫の集会は必ず参加。

陽だまりで昼寝が日課。

縁側には目がない。

捨て猫は拾う主義。

三毛猫を見ると確認せずにはいられない。

身体能力とスレンダーボディには自信あり。

おいしいものが好き。

小型薄型レンズ眼鏡を愛用。

スーツは着ない、ラフファッション重視。

の主に猫に偏ったこだわりのあるのは猫女^{ねね}。人間ではなく猫又。

自称は仙狸^{せんり}。猫の物の怪の美人。猫耳と二本の尾は隠さず常に体現している。その美貌と言葉使いの不一致だけは、彼女の魅力を邪魔しているが、当人はまるで気にせず、人間の男だろうとオス猫だろうとよく捕食する。

「相手にして欲しいだけです。無視するに越したことはないでしょう。ちなみに別作品ですから、混同しないでください」

双剣を見る猫女とは違い、淡々と机に積み上げられる書類を片付けていく、スカートスーツのポニーテールの女、言埒^{ことわ}。

所内唯一の常識人を自称。

仕事はまじめ。

初見の相手には、まずボディタッチ。

スカートスーツ姿の自分がエロくて、勝手に興奮する時あり。

資格を六十九個持っている。

怒ると対象をとんでもない所へ飛ばす癖あり。

自身の雷で町を停電させるのがストレス蔓延時の発散方法。

の人間であり、相談所の受付兼事務担当の触れた対象の心を知ることの出来るサイコメトリスト。超感覚的知覚の持ち主であり、物質転送、エレクトロマスターの超能力の発現者。最近はサイコキネシスとパイロキネシスの発現に、勤務時間外を利用しては開発に勤

しむ努力家。

「そう言えばあ、トリカブトの花の蜜をく、蜂が蜜にして食べれる
とあ、人為的にならないで、殺せちゃうんだよあ？」

「あんたは脈絡なさすぎさあ」

「いきなり持論を展開しないで下さい」

「本当のことなんだよあ？ 試すう？」

「遠慮するさあ。あたしや死なんけんど」

「私は一発ですから謹んで遠慮します」

「残念ですう」

所内は日光が指さないために空気が悪くなりがちだが、デスクー
角にある森のような植物の配置から漂う森林浴のような清涼感の光
合成に所内の空気が常時清掃され、それらの中に埋もれるように咲
く、淡いピンクの花を模す姫ファッシュョンに身を包み、スズランを
愛でている女は飛芽^{ひめ}。

夜は九時に寝ないとお肌の大敵で、残業は不機嫌。

部屋はピンクと緑のジャングル。

家事は出来るけどしない派。

毒には異常に興味を持つ。

知らない毒は、まず自身で確かめる。

薬学博学

所長で三度実験経験あり。

空気が悪いと風邪を引く。

水がないと皺が増える。

怒ると、トコトン壊す。

そして、ポイズンプラントファクターとして、植物を自在に操り、
毒知識に優れ、あらゆる免疫性を兼ね備えている人を模した異種生
命体。場の空気を読めないことに気づかない天然でもあり、愛らし
い姿にマスコットのな存在でもあるが、所内の食事版を兼ねている
ため、機嫌を損ねると、食中毒が起こる可能性が否定出来ない。か
つて三度ほど双剣が救急病院へ搬送された伝説がある。

「うおおっ！ やつちまえっレッドッ！」

そしてまた別の一角、おもちゃと戦隊ものが並ぶデスクでビデオに食い入る少年、紅鬼^{こうき}。

弱きを助け、悪を裁く。

日曜七時三十分にはテレビの前へ行く。

早寝早起き基本。

将来の夢はもちろん戦隊ヒーロー。

宿題は見せてもらう派。

女の子が苦手。（所内の女は家族と思い、平気）

孤独の人を放っておけない主義。

おやつがないと駄々をこねる。

所長を悪だと思い、喧嘩を売る遊びに夢中。

小学生の風体で戦隊ものが大好きな少年は、今日もヒーローの活躍を自分のように決めポーズを真似る。

「水神戦隊シーレンジャーッ！ 母なる水がある限り、青き星は俺たちが守るっ！」

テレビ音声と紅鬼の声が重なる。

「おー、今日も飛ばしてんさあ、紅鬼。かけーかけー」

「戦隊ものも良いけれど、宿題もしないとダメよ」

「ヒーローもお、毒は一発だよねえ？」

双剣には大して見向きもしないが、紅鬼の無邪気には、大人の女たちからの微笑ましい自愛の視線が包む。

「おうっ！ でも俺はヒーローだから、ピンチを救うんだっ！ 毒だつてへっちゃらなんだぞっ！ 正義のヒーローなんだからなっ」

しかし、紅鬼は分かっている。だから大人は言わない。宿題でピンチになるのは自分だ——ではなく、紅鬼は読んで字のごとく鬼だ。人に化け、小学校にも通っているが、その内に秘めるは強靱な肉体と圧倒的な力。若干赤みがかった髪は名残を残し、本来の力を発揮すれば、それこそまさしくの鬼と化す。それはつまり——ヒーローにやられる側になってしまうということだ。

この世界には、混乱がある。

天世、魔世、異星のあらゆる生命体が世界を開き、世界に集った。天子に悪魔、異星人、特殊能力生命体など。ゆえに混乱は起きた。世界は大変革に追い込まれ、戦乱すら招くことになる。しかし、時を同じくしての地球では、人類により立ち上げられた複数の世界機関の迅速な整備において、いまだに制限こそあるが、異種人の地球への渡航が認可され、今では混乱も落ち着きを見せてきた。

だが、それでもなくならない問題に、世界機関は新たな機関を創設し、各国で裁判所として機能していた機構が分解され、新たなものへと転換し、その末端組織も今ではあちこちに誕生した。

その一つがここ、夜吹相談所である。

受ける依頼は異種人間のトラブルが主。今までの弁護士事務所や探偵事務所などとは異なり、通常任務の他にも、組織勢力を用いての代行執行としての能力を用いての制圧なども請け負っている。ゆえに、相談所には普通の人間はいない。

「なっ！ なっ！ なっ！ 何じゃこりゃあああああっ！」

そして、双剣がついに吼えた。

「うーさいさあ、所長」

「無視されて喚くだなんて、どれだけ子供なんですか」

「頭はあ、おじーさんかなあ？」

「出たな、はげはげ星人っ！」

四者四様の反応。仮にも雇用主である。労わりの欠片もなくの注目度の集約。紅鬼と比較しての子供ツプリの露呈にしかないと言埒、猫女、飛芽は視線を向け、紅鬼は戦闘のポーズをとっている。「誰がはげじゃあっ！ 俺ははげじゃねえっ！ キテルだけだからっ！」

——シーン——。

絶対的静寂が所内を包み込んだ。そして、禿げていないことを証

明するべく髪を大きく掻き上げた。蛍光灯の明かりが、そこには映る。

「うわあ、M字さあ、つるつべさんの前触れさな、所長」

「常時帽子など被るからです。蒸れは禿げの一因ですよ」

「禿げにはあ、毒が効くかもしれないですねえ。試しますう？」

「やーいはあーげっ！ えーいはあげっ！ 所長が禿げたあっ！」

またもやの四者四様の反応に静けさが喧騒へと変わっていく。

「うわあああっ！ うるせえっ！ うるせえっ！ 男はなっ、苦労の数だけ禿げんだよ、ちつくしよおおっ！」

——し——ん——。

更なる沈黙が訪れる。今度は長い。

「……所長さ苦労するつぺこた、したんべかさ？」

「するわけが無いでしょう、猫女。苦労しているのはこっちですよ」

「だからあ、毒をもって禿げを制すうだよお」

「エロいことばっか興味持つから禿げたんだっ！ エロ禿げ星人めっ！ 俺が成敗してくれるっ！」

誰一人として心配することも無く、馬鹿にする。自分たちの雇い主を。

「ええいつ、黙れ黙れ黙れっ！ Mはな、つるつべげにはなんねんだよっ！」

全くの子供である。

「はいはい。所長。悲しいからと言って私たちに当たらないで下さいね。そんなに気になるんですたら、アートネエちゃんにご予約入れますか？」

「いるかつ！ んなもん邪道だっ」

育毛も植毛も嫌と来た。ではこのまま広がっていく額と付き合うのだろうか。

「んなら、リーブ21さ？」

「一緒だつ。俺は旅立つ息子を見送ったやんだよ」

「ムスコ？ 飛芽。何だ、ムスコって？」

紅鬼が飛芽に首を傾げる。

「ムスコはねえ、紅鬼も持つてるんだよ。私たち女はないけどね」

飛芽の視線が下がる。

「んん？ 女になくて、男は持つてるのか？」

「そうよ。男はみいんな、ムスコを持つてるの……いたっ」

飛芽の手が伸びた。紅鬼の方へ。しかし、言埜がそれを止める。

「紅鬼に妙なことを教えない。全く、何を考えているんですか？」

「何をつてえ、もちろん、ナニをだよ？」

恥じることも無く平然と言つてのける飛芽。飛芽が言埜を見る。

言埜顔は若干赤くなっていた。触れている以上、飛芽画創造していたものを見てしまったのだろう。

「あんたは真性の淫乱だんなあ」

そんな飛芽を猫女が笑う。

「なあ、だから何だよ、ムスコって？ 淫乱って何？」

「だからああ、それはあ……も」

「お黙りなさい。紅鬼、あなたはまだ知らなくて良いの。さつさと宿題をしないさい」

飛芽が言埜に抑えられる。はぐらかそうとする言埜に紅鬼は不満げに頬を膨らませ、猫女を見る。

「まああれさあ、学校帰りに草むらでも探せば分かる時が来るもんさ。男の子たるは、それが入り口ゆーもんさ」

「猫女、あなたまで何を言っているんですか」

言埜が飛芽を抑えたまま猫女を睨む。

「おーこわこわ。人間様は怖かねえ。あたしや仕事に戻りゃんす」
怖がつてはいないが、ややこしくする気もないらしく、猫女はおとなしくデスクに向かい直った。

「飛芽、あなたもです。片付いていない仕事があるんですから、ま

ずはそつちに集中してくれからにしてください」

「……ふぁーひ」

うちを抑えられ、くぐもった声で返事をした。

「って、無視か？ 俺を無視して楽しいかあっ！？ 聞けよっ！
っ！か聞いてくれよっ！ 切実なんだよあっ！」

と、忘れていたそ双剣が身を乗り出す。仕事に戻るうにも戻れない状況に、言埒は苛立ちを押さえ込み、ため息としてストレスを吐き出した。

「あ、お客様のようです」

「おっ、今日は来たんさ」

「久しぶりですう。とっておきでおもてなしするですう」

「おっしやっ！ 正義のヒーロー、レッド紅鬼様のお出ましだっ！」

その時、入り口に浮いた人影が、静かに扉を押した。だらけきっていた雰囲気が一変する。それを象徴するように業務計画表には、空白しかなく、あるのは、いつか書かれたのだろう。一人が配属されてくるという予定がうつすらと消えかかっているだけだった。

双剣だけが一人、誰も相手にしてくれず、鏡に向かって呆然としていた。

「あの、すみません……」

《いらっしやいませえっ！ 夜吹相談所へようこそっ！》

ついその瞬間までそれぞれのデスクにいたはずの四人が、扉が開いた瞬間に、両手を広げての歓迎ムードムンムンの笑顔で出迎える。元来相談所と言うものは、悩める人が来るのであって、ハイテンションで出迎えることは失礼に値する。しかし、みな笑顔。それも飛びっきりの。

奥では鏡に向かっていた双剣がソフト帽を被り、キテル頭を隠し、ひげを撫で揃える。

「あ、え？ えっと……」

当然の反応。驚きと困惑にたじろいでいる。

「ささ、入った入ったあ。お客様一名様ごあんな〜い」

「ごあんなあ〜い」

猫女と飛芽が引き返えさせまいと腕を掴み、中へ引きずり込む。

「あつ、ちよつ、ちよつとっ?」

「紅鬼、お茶とお茶請けのよ〜い」

「ラジャーッ!」

受付担当の言埜はそそくさと出迎えを終えると、契約書類の用意に入っていた。

「ささ、ここに座りんさい」

「ごゆつくり〜して下さいねえ〜」

応接用のソファに座らせると、猫女と飛芽はやはり逃がさないようにと、笑顔の中に飢えた獣のような光を宿したまま、男の両端を埋める。

「あ、あの、えつと……」

両手に花に見えないことも無いが、困惑する男と笑顔の二人。場所が異なれば別のサービスマンになるだろう。

「初めましてにゃん。あたい、猫女って言うにゃん」

ものすごい愛想を振りまき、語尾まで返る猫女が男の顔に近づく。
「わたしはあ、飛芽って言いますう。今日はあ、よろしく願いますねえ」

こちらはこちらで、職業が明らかに異なっている。服装からそういう店に見えないことも無い。

「ほい、お待た。熱いから気をつけてな、兄ちゃん」

そこへコーヒーとクッキーを差し出す紅鬼。

「ようこそ、夜吹相談所へ。初めまして、私は言埜と申します」

そこへ数枚の書類を手にした言埜が対面のソファに腰を下ろす前に握手を求め、男もあわてて立ち上がり、握り返した。

「どうぞ、お座りください」

「あ、はい、どうも……」

まともに見える言埜に、男はどこか気恥ずかしげながらも頭を下

げ返し、再び腰を下ろした。

「すみませんね、うちの社員は少々やる気に溢れてまして」

「さてさて、依頼は何さね？ 青少年。お姉さんに腹を割って話してみやしゃんせ」

猫女が男の腕に絡み、自分の胸に当てさせる。

「あつ、ちよつ……うあ」

男が顔を赤くして、猫女の胸元を見ては視線を逸らせる。

「どおんな危ないことでもお、私に叶うものはないのでえ、なあんでもどうぞお？」

「ひいっ！ な、何ですか、それっ？」

快楽がきたと思えば、恐怖がくる。不気味なとげをいくつも持つ植物を飛芽が男に近づける。

「二人とも、仕事の邪魔をしないで下さい」

呆れたため息とともに、言埜がごめんなさいね、と苦笑した。

「さて、話を戻して、今回はどのようなご用件ですか？」

言埜の言葉に、男が声を発す。

「あ、あの、依頼人じゃないんです、俺」

——しーん——。

沈黙。双剣が自分の中央のデスクに腰を下ろす音だけが響く。

「あ、あの、きよ、今日から着任すること……あ、あれ？ あの、皆さん？」

業務計画表に描かれていた予定。そこには仲間が加わるという印が、今日の日付にある。

「え？ あ、あの？ もしもし？」

しかし、男が依頼人じゃないと分かるや否や、

「なあんや、客やないんさ。つーまらんさ。あたい、昼寝してくつわ」

「せえゝつかく、とっておきをお、持ってきたのにい、無駄になっ

「ちゃったあ〜」

「んだよ。じゃあ、コーヒー回収〜」

「ふう。せっかく書類を用意したのに、また整理しなおさないといけませんね」

四人がそそくさとお琴から離れ、それぞれのデスクに戻っていく。孤独に残された男は、わけが分からずに右往左往していた。

「お前ら、反応が素直すぎんだろぅがよ……」

双剣だけが、入れ替わりに立ち上がり、男のほうへ歩き出した。

ブログ1 夜吹相談所（後書き）

先日更新予定を修正しましたので、こちらでも改めて。

明後日にはs o l aを更新するつもりです。

その後の展開は、今現在パソコンを修理に出しているので、戻って来次第になりますので、その都度s o l aに追記をしていきます。

ブログ2・アリスティック総合事務所（前書き）

これも本日更新です。

一応この二つの視点で書いていければと思います。

プロローグ2・アリスティック総合事務所

人が人の世界を築き、天が天の世界を築き、物の怪が物の怪の世界を築き、魔術師が魔術師の世界を築き、悪魔が悪魔の世界を築き、異人が異人の世界を築き、神が神の世界を築く。

想像であり、空想であり、幻想であり、過去であり、夢であり、現実である。

そんな古の日々は今は昔。竹取の翁と言う者もいたことすら、はるか昔。

世界は一つの世界に集約し、消滅し、邂逅した。

不干渉による閉鎖的世界は終わりを告げ、全ての生の集約すべき整う環境下に、それは集った。

「局長、最近クライアントの申し込みが多すぎませんか？ 専属契約も過去最高です」

人間の女、瀬戸綾乃。ハイスクール卒業後、進学ではなく就職を果たし、現職に就き今年で四年目。後ろ一つ束ねの長髪が特徴の事務兼人間の相談担当官。

「どこの事務所もクライアントが飽和状態だとお伺いしたことがありますわ。あの事務所は除いてだとは思いますが」

亜麻色の長い髪の乙女。そのような印象を受ける美女。豊満で妖艶な体は天の使者、天使の特徴。主な業務は相談窓口受付兼天使担当秘書官、ユーフォリア。

「全くだ。超過労働の手当てがあるからまだしも、それがないんじや、こっちが辞めるっての」

物の怪の女。犬神の夜々（やや）。銀短髪に犬歯のような牙と臀部の銀の尾が特徴。物の怪全般の相談を請け負う弁護部門、物の怪担当官。

「もう少し、従業員を雇って頂けますと、魔術訓練にも休暇利用できるのですけれど」

キャリアウーマンのビジネススーツ姿の女、グレース。青い瞳が魔術師の特徴を示し、金髪テールが凜とした華やかさを放つ。傍らのスーツがけには、白金のローブがかかっている。主業務は魔術師担当官であり、総合相談受付秘書官。

「つーか、下らない依頼とか小会社に廻せば？ 相談所で解決する問題とか、マジ時間の無駄なんだけど？ たまには実戦とかしてストレス発散しないと、おかしくなっちゃう」

制服と言ったものがない中での、せめてもの礼服と言ったものがある中での、ゴシック服の似合うパンクファッションの悪魔の女、リィデイル。目を強調した化粧と細く黒い尾が不満げに揺れるのが、最近の特徴の悪魔系担当弁護官。

「本当なのですですよ。私なんてですすね、規模が宇宙全域からなのですから、誰が誰だったかなんて覚えていられないくらいなのですすよ」

異人の女、アルビス。一見は綾乃同様の人間だが、耳が横にとんがりを見せ、大きい。物の怪の人狼族のようでもあるが、情報処理能力が他の生命体を圧倒している。それ故にもっとも規模の大きい全宇宙弁護担当總監と言う、事務所の中では取締役に匹敵する役職を持つ。

そして、六人の視線と言葉を受ける、事務所最奥部にひときわ大きなデスクを構える女がそれを受け止める。

「そんなことはね、あんたらに言われなくてもあたしが一番理解してるっての」

相談件数がうなぎ登りの経営上はうはうはあるが、その処理に身を削る労働疲労がピークを迎えようとしている社員たち以上に頭を抱えている女、女神のレイシア。事務所内では最も美しい美貌を有し、全能を発揮してはいるが、それでも一般相談、顧問弁護、経理、裁判出廷など諸々の仕事をこなすにも限界と言うものはあるわけで、その美貌もやつれ気味。

「従業員雇おうにも、有能な人材って少ないのよ。即戦力が必要な

の、うちは。というよりも顧客情報多すぎてスペースないのもどうにかならないわけ？」

「データベース作業完了まで約二年ですすう」

アルビスが作業担当しているが、顧客が多すぎてデータ化するにも、人間の作業効率の数百倍の効率を持つアルビスでさえ、てんてこ舞い状態。

代表取締役のレイシアを含めての人数は七人。それがこの事務所、アリスティク総合事務所。中心街一等地に立つ超高層ビルに事務所を置き、名も知れた一級の事務所だが、広い室内の大半は書棚と応接場として埋まり、人数的にも増やそうに増やせない状況。

「嬉しい悲鳴って、所詮は苦痛なのよ……」

レイシアの言葉とため息に、全員が同じため息を漏らしていた。その間にも相談電話は次々と鳴り、嬉しい悲鳴もどこへやら、休暇を求める悲痛の悲鳴が事務所内に木霊した。

「ああん、もおっ！ 夜吹相談所にはどうしてクライアントが流れないのよっ！」

レイシアの言葉に、冷静なツツコミが返ってくる。

「夜吹相談所は宣伝してませんし」

綾乃は特に興味を持つことなく、パソコンにデータを打ち込んでいた。

「あそこは能力はこちら同等なのですけれど、場所が場所ですから、気づかれないという欠点もありますね」

ユーフォリアが頬に手を当て、少し残念そうに言う。

「夜吹はエロイから嫌いだ。しかしな、言埜は良いぞ。あいつは優しいし、使える。うちに呼べ」

夜々は相談所自体より、双剣に対して嫌悪があるようだ。その一方で言埜には信頼があるようだ、レイシアは聞き流す。

「紅鬼君には秘められた魔力反応を覚えているので、またお会いしたいですね」

グレースは単純に魔力能力にしか興味がないようだ。

「あたし、あのフリフリ毒女とは、決着つけないとなあって思ってたよねえ。あいつ、マジぶりぶりぶりっ子でむかつく。あー、思い出したらまた苛々してきた」

リーデイルは属性の近い飛芽に対して、思う所があるよう。

「私は、夜吹所長のこと、ちよつと格好良いなあなんて思ったりしてるのですよお」

ポツと頬を染めるアルビス。一斉に奇異の目が向けられるが、レイシアだけは盛大にため息を漏らした。

「あれに頼るのは嫌なんだけどねえ。でも、この現状は無理があるし、しょうがない、か。綾乃、例の件、双剣のところに委託しについて」

「ええ？ 良いんですか？ あれは、夜吹相談所には担当者がいないんですよ？ と言うより、あそこに所属する担当官はほとんど現場担当官で、事務は実質一人だけですよ？」

レイシアの言葉に、綾乃が反対の意を持って意見する。

「良いのよ。たしかあいつんどこにも新しい担当官が着任するはずだから。言埜さんの能力と、夜間なら猫女さんの仕事消化率には期待できるわ」

「あら？ そうでしたの？」

ユーフォリアが意外そうに頬に手を当てたまま、レイシアを見る。レイシアとは同界にいて、レイシアの直属の天使ではあるが、あまり敬う態度は見られない。

「へえ、資金繰りに苦労してる割には、そう言うことしてるわけね、あそこも」

夜々が大して興味はなさそうだが、一応話には乗る。

「意外ですね。でも、少し興味が湧きました」

グレースが話を聞きたがっているが、仕事中は仕事に集中するしかなかった。

「つーか、使えんだろうね、そいつ？ あれはこっちも結構手間つてもんだよ？」

出来るもんなら渡せ、と言いつつも、案ずるリーデイル。

「大丈夫ですよ。夜吹所長なら何とかしてくれるはずなので
すですよ」

アルビスは無責任と言うのか、それとも双剣への全幅の信頼なのか、それしか言わない。それぞれの意見があるようだが、レイシアは手を叩くだけで静寂を生む。

「はいはい。こつちもこつちでやることあるんだから、いちいち気にしないの。綾乃、書類の用意して。私と行くわよ」

「はぁーい」

仕事に戻る中で、レイシアは鏡で身だしなみを整えていた。それを含み笑みで見るリーデイルたちは顔を合わせて、なにやら肯きあっていた。

「気がないくせに、ありゃ、絶対気があるね」
リーデイルが不敵に耳打つ。

「そうですね。レイシア所長は何だかんだで信用されていますし」
ユーフォリアは喜ばしいことのように笑む。

「男っ気ないレイシアには、ちょうど良いんじゃないの？ あたしは御免だけど」

夜々は肩をすかす。趣味が悪いとでも言うように。

「え、ええっ！？ 所長、夜吹所長が好きなんでふはあっ！？」

アルビスが驚きの声を出す、とつさに綾乃が口を塞ぐ。

「ダメだって、アルビスちゃん。ここで機嫌悪くさせちゃ、また夜吹所長と喧嘩になっちゃうから」

綾乃の言葉に、一同がアルビスに肯く。んゝつとアルビスはその肯きに強く反対の意を唱えたいようだが、押さえ込まれた。

「綾乃？ 何してるのよ？ 早く行くわよ」

「あ、はい。じゃあ、アルビスのことお願いね」

「分かりましたわ」

「はいはい。さっさと行ってきたって」

「ふっふーん。ちよつとしたストレス発散しちやおっかなあ？ ねえ、アルビス？」

「んん、んんっ！」

一人レイシアを止めたいアルビスを他所に、綾乃は手早く書類をバッグに詰め込むと、レイシアの後を追った。

「アルビスどうかしたわけ？」

「さ、さあ？ 何か電波でも受信したんじゃないですか？」

「おかしな子ね」

何も気づかないレイシアを他所に、事務所内にはアルビスの叫びと、主にリーデイルの楽しい悪魔の笑いが木霊していた。

世界が大変遷を起こし、異次元が一つに繋がった時、七つの世界の中心は、銀河太陽系第三惑星アースを全ての中継星として、世界は新時代を構築した。それは戦渦を持って始まり、全ての敵対に破壊が進んだ。多くの犠牲を出し、多くの難民を出し、資源を失い、文明を失った世界が誕生し、世界は明けない夜として、涙すら枯らせてしまった。そうして気づく、和平と言う悲しみを払拭する動きに、徐々に世界は力と交渉を持って歩み寄る。そこからは武器、暴力による戦争ではなく、対話による戦争。戦争とは終わることではなく、気づかない今でもそれは起こっていることでもあった。復興と構築が始まり、異文化の接触、交流が小さな所で起こり、それが次第に広がっていく。犠牲を払う開闢を望むものはいない。

ただ、恐れから、力を見せ付けるために戦争は起こってしまった。

それから百八十九年後。完全とはいかぬ七種に通ずる法の整備の流布に、巷を迷う民がいる。争いを起こす民がいる。それを平定し、一刻も早くの世界泰平を目指すために組織された機関が、七界特別執行廷。ダブルエスエイチ通称SSH。人間界だった頃のアースの司法廷を再編し生まれ変わったもの。法の流布活動に努め、国という概念を消失し、人類として踏み出した歴史の中で、根強く残る領土問題、異種人への偏見、差別、武力排除などの問題から、生命の飢餓、貧困、扮装などを取り仕切り、法に反する処罰を下す司法機関。そして、検察

として違法者の取り締まり、SSHへの立件などを要請する為に組織された組織は、七界検法取締局、通称^{スライコ}SICO。と改変し、弁護に当たる組織も七界保全弁護協会、通称^{スバダス}SPDSとして生まれ変わり、七種族による、七種族の為に、社会のシステムの整備が徐々に安定を迎えようとしていた。

その昨今の中で、七界保全弁護協会に所属する夜吹相談所は一向に顧客が伸び悩む事務所ではあるが、一方のアリスティク総合事務所は、多忙極まりない日常に、安らぎの時はなかった。午前八時からの業務開始と同時に、本日のSSHで執り行われる裁判への弁護要請による出廷から、電話相談、直相談、訪問活動の一般業務の他に、SPDSに所属する事務所には、SSHの許可を受ければ、その事務所に応じる特別な能力解放による事件未然阻止措置の発動が認められている。これはクライアントへ及ぶ危害を未然に阻止し、安全かつ迅速に解決へと導く実力行使。この権限はSICOにも同様にあるが、SICOの権限には、逮捕権と共に強制送還の権限がある。罪を犯した異種人を祖国へ送ること、アリスにおける処罰件数を減らす目的もあるからだ。多くの異種人のクラス用になってきたアリスでは異種人口が爆発的にアリスを覆い始め、昨今になり、SSHがようやく定住制限を定めた。

e p 1 ・新たな仕事（前書き）

新年明けましておめでとございます。

仕事の関係で遅くなりましたが、少しずつ更新していきます。

ep1・新たな仕事

「あ、あのお……」

男が一斉に元に戻っていく面々に、戸惑いの表情を浮かべるが、そこへ双剣が来る。しっかりと帽子を被り、すでに頭は隠している。

「

「気にすんな。あいつらは俺たちにや冷てえんだ」

双剣が男の肩を抱き、デスクにいる四人を僻むように見る。

「で、誰なんさ、それ？」

猫女が横目を流すように二人を見る。二本の尾が空に伸びうねっている。興味がないわけではないらしい。

「お前ら……前に言ったことくれえ、覚えとけ」

双剣の言葉に、一同が顔を見合わせる。

「言埜、覚えてるさあ？」

「そう言えば、仰ってましたね。人材不足を補う人材がいた、と言埜が思い出したようで、男を見る。

「でもでもお。そんなにお仕事ないよねえ？」

飛芽の言葉が毒舌でもなんでもないのだが、室内に沈黙が漂った。事実上においてその言葉は全員の視線をスケジュール版に集めさせる。

「最後に働いたのって、一昨日だぜ。双剣、仕事取ってくれよな」
本日の予定表には空白。数日後には一件の裁判の仕事が入っているだけ。

「うるせえな。立地が悪いんだよ、立地が」

「話が逸れてるさあ。早く戻しんさいな」

双剣が自分の事務所だと言うのに経営は閑古鳥が鳴き続けている。そんなことはどうでも良いと、猫女が話に区切りを打つ。

「ったく、しょーがねえな、お前らはよ。んじゃ、挨拶してくれ」

「あ、はい」

そこでようやく蚊帳の外だった男に注目が戻る。

「初めまして、ガイア・ドラクルです。所属はバンパイア。人血混合種です」

その挨拶に、大した反応はなかった。七種の世界が開かれ、バンパイアの属性は妖怪。夜吹相談所においては、猫女と種族は同じだった。

「バンパイアですか。その割には人間らしいですね」

一応人間に属する言埜。外見に特徴が見られないガイアに、眼鏡を上げた。

「あ、はい。僕は人血混合なので、純粋なバンパイアのように牙があつたりはしないんです」

ガイアの紹介に、へえ、と一向に反応があつた。

「なあ、血って吸うのか？」

紅鬼がもつともな所を聞く。

「いえ、基本的にはバンパイア専用に設立された血液銀行で輸血用血液を購入する決まりなんです。普段は血液に反応するわけじゃなくて、血液中に含まれる赤血球の摂取が栄養源なんです」

「そうなんだあ。じゃあじゃあ、古い血でも平気なお？」

飛芽が興味深そうに聞いてくる。それでもその手はデスク上の謎の植物を弄っている。

「ええ。特に問題はありませんが、やはり新鮮な血液の方が鮮度が良いので、状況次第と言うことになりますね。バンパイアだけが輸血パックや血液製剤をどくせんできるわけではありませんから」

あらゆる生物はやはり鮮度が良いものを欲する。それは共通してのことだろう。

「普段の食事は血液だけですか？」

「そうですね。他の種族が食物とするものは、バンパイアにとっては味のないものでしかないので。あ、でも僕は大丈夫です。定期的に血液を採れば、普段の食事でも平気ですし。レバーなどもありますから」

「ま、バンパイアは味覚があるわけじゃねえからな。んで、細かいことは後にしてくれ。仕事の話だ」

双剣がガイアの肩を抱いて全員を注目させる。

「ウチは生憎現場担当官ばかりで、基本的に事務を言埜一人が担当している現状だ」

「あたしもやってるさあ」

言埜は現場と事務を担当する。それは疲労を大きく伴うが、この事務所ではそれが仕方がないことでしか成り立たない。猫女も夜間に関しては夜行性の猫の特性を活かし、昼夜逆の勤務をしているが、それでも言埜には及ばない。だが、言埜がそれでも疲労に仕事を休むようなことはない。それは簡単な理由だ。忙しくないから、両立したところで大して負担にならないという、経営危機の状態があった。

「それでも本職は現場担当だろ。んでもってSPDS支部庁からガイアを異動した。ガイアは現場も担当できるが条件がある。だから、ここでは事務を担当する。言埜、仕事を教えてやれ」

「よろしく願います」

双剣にあわせてガイアが一礼すると、言埜が立ち上がる。

「ええ。こちらこそ。ところでガイアさん。その、条件とは？」

現場に出るに当たっては一般人としての人間にはその権限がない。観察対象、保護対象など身の保全が前提条件による力の発動のみがSPDSには認められている以上、一定の能力がなければこの世界では誰かを守ることは難しい。その点において、夜吹相談所のスタッフは、全員が人間を超越した能力と種族であり、事務処理能力に長けた存在がいない。そこで双剣はガイアを引き入れたらしい。

「えっと、申し上げにくいんですが、バンパイア種族には特性があるので、戦闘や抗争には参加出来ないんです」

「何で？バンパイアって強いんだろ？」

強いことは正義だし、SPDS所属なんだから良いじゃん、と紅鬼が言うがガイアは苦笑いを浮かべる。

「はーん。そう言うことさねえ」

猫女が気づいたようで声を漏らす。それにガイアが、はい……と、少々気まずそうに頷いた。

「何々い？ どーゆーことお？」

飛芽が顔を上げる。

「流血、ですね」

「はい……それ以外の件に関しては問題ないんですが、血に関する
と自我の抑制がバンパイアは弱いので」

「つーわけで、ガイアには書類作成を主に任せる」

双剣に肯く一同。

「でもさあ、仕事もねえのにどうすんだよ？ 意味ないじゃん」

紅鬼の無垢な問いは核心であり、再び所内は静けさを増す。

「い、良いんだよ。アリスティックみてえな忙しさはここにはいら
ねえんだ」

「その比較は天地の差があるってもんさあ」

「だよねえ。でもお、私、いつつもリーディルに絡まれるからあ、
好きじゃないかなあ」

「ですね。あそこのような多忙は私もごめんですが、ある程度の充
実感欲しい限りです」

この暇な仕事は退屈だが、アリスティック事務所のような忙しさ
はごめん。普通という忙しさが欲しいようだが、それほどの忙しさ
は夜吹相談所には滅多にないことだった。

「それは良かったわ。この仕事は退屈しないと思うわよ」

その時、たまにしか開かれることのない扉が開き、二人が姿を現
した。

ep1・新たな仕事（後書き）

今回は少しでしたが、次回作よりは真面目に更新していきます。

次回作は「明日のキミへ」です。

更新予定日は、1月10日を予定してます。

本年もトモミツの作品をよろしくお願いします。

e p . 2 久々の仕事も・・・？（前書き）

少し予定が遅れましたが、更新です。

ep.2 久々の仕事も・・・？

「ん？ ほお、こいつは珍しい。嫌味ならじっくり聞いてやれるが？」

双剣が姿を見せた姿に、嫌味たらしく言う。

「そんなことするわけないでしょっ」

そんな双剣の挑発を軽く受け流すレイシア。先ほどの事務所での様子はなく、凜として、あくまでも所長としての態度を表している。

「お前が来るなんてそうとしか思えないんだがな」

「失礼ね。別に貴方と対抗するつもりもないわよ」

「と言うかあ、相手にする価値もないですからねえ、所長には」

「うるせえっ！ 俺はおめえの上司だっつーのっ」

レイシアの姿に相談所が賑わいを見せる。

「だったらもう少し仕事取ってくるが筋つてもんさあ」

「立地が悪いんだよっ、立地がっ」

だが、すぐにいつもの面々での下らないやり取りになってしまう。

「レイシアさん。いかがなさいましたか？」

それを見越して言埜が席を立った。

「こんにちは、言埜さん」

「お久しぶりです、綾乃さん」

ギヤーギヤー言っている隣で何食わぬ顔でしれっと挨拶を交わす言乃と綾乃。同じ人間同士、つつがなく営業スマイルで応対する。

「止めなくても良いの？」

綾乃が二人に視線を流すが、言埜は視線を向けることなく綾乃を応接ソファに案内した。

「ええ。いつものことですから。それよりもどうぞ、お掛け下さい」

「そ、そう？ それじゃあ、お言葉に甘えてさせてもらっわね」

やがて双剣が弄られたすとレイシアも綾乃とともに言埜の案内を受けるが、少々双剣が気になるようで視線を送るが、言埜は慣れた

様子で対応するだけだった。

「おじゃましまーす」

奥の応接スペースに言塾が案内する。

「つて、何勝手に敵を招いてんだよつ、言塾」

双剣の隣を過ぎた辺りで、双剣がこちらを思い出す。

「て、敵って貴方……。私たちは同業者じゃないのよ」

「いやあ、収益の差からすると、そちらの敵と認識されても仕方がないような……」

レイシアは友好関係を求めたいようで、双剣の言葉に地味に痛みを感じているようだが、その隣の書類を胸に抱えている綾乃は苦笑だ。

「そつだよねえ、ウチとじゃスタートすらないレースだもんねえ」

「ん？ スタートもないのにレースしてんの、俺たちつて」

紅鬼が理解していないのだろう。どういうこと？ と一人きよとんとしている。

「いや、そうじゃなくて、多分、ライバル関係だけど、経営の差が激しいってことじゃないですか？」

「だよねえ。ろくにお給金も支払われていないウチとじゃ、相手にしてくれないもんねえ」

ガイアが困ったように言う。しかし、猫女と飛芽が肯く。

「え、えつと、私は別に勝負だとかは思っでは……」

レイシアがそんなつもりはない、と両手を広げて見せるが双剣にはそれすらも余裕に見えてしまうのだろう。

「ああ、そうさつ！ 相手にすらなんねえよつ！ こいつらとはよつ。んなこと俺が一番分かってんだから、いちいち言うんじゃねえよつ！ 泣きたくなるだろうがよつ！」

後半涙目の双剣。見たくない現実に行くレイシアがいる以上、卑屈にもなりたくなるようだ。

「え？ ちよつ、そんな泣くようなことじゃないでしょ？」

経営者である以上、レイシアへ羨望はあるようだが、対抗しうる

ものがないだけに声を荒げるしかない双剣に、レイシアが宥めようとするが、火に油を注ぐようなものでしかなかった。

「うるせえっ！ 嘲笑しに来たなら帰れっ！ このブルジョワめっ！ 紅鬼っ、塩だっ！ 塩持ってこいっ」

一人熱くなりだした双剣に、レイシアが困惑げに言埜を見る。隣の綾乃は久々に見る夜吹相談所の様子に既に他人のように飛芽の方へ歩いていた。

「飛芽さん、また新しいの増えました？」

机の上に有るものは書類などではない。書類は全体の十%もない狭い割合に置かれているだけで、他は仰々しい植物が飾られている。「そうなのお。見て見てえ」

毒性植物をあげ、綾乃は興味深そうに聞き、リーディアがまた遊びたがっていたというと、飛芽は若干嫌そうながらも、どの植物を実験使用か模索しはじめ、見かねた猫女が向こうで泣けば良いさあ、と双剣を隣の部屋へと連れて行く。悔しいのか泣きたいのかよくわからない鳴き声が聞こえる中で、言埜が話を進めていく。レイシアは困惑しているが、何事もなかったように、話を戻され、そちらに意識を向けるしかない状況になってしまった。

「先ほど何か仕事の持込のお話をされてましたが、具体的にはどういうことか、教えていただけますか？」

「え、ええ。綾乃」

切り替えがすぐには出来ないのか、レイシアが隣の綾乃を見る。

「はい。今回夜吹相談所に、この事件を委託させていただこうと今日は邪魔したんです」

そついいながら差し出す書類。言埜が受け取り、風を開くと数枚の書類と写真が出てきた。

「やれやれさあ。双剣のやつあ、小さいことにこだわりすぎなんさあ」

すると、猫女が面倒くさそうに隣の部屋から戻ってきて、当然のように言埜と隣に腰を下ろす。

「ん？ 何さあ？ これは」

そのまま猫女が言埜から書類をかつさらい、眼前に広げる。

「何々？ 異種生命体による無差別侵攻計画の未然措置？」

猫女が首を傾げ、言埜がそれを横から覗き込む。

「あの、これは一体……？」

今代において、世界は平穏を迎えている。かつては多発していた事件も、SSHによる法の整備に落ち着きを保っている。だからこそ、この文字を記す書類に二人は何の冗談？ と表情を浮かばせている。

「冗談みたいに思うのは納得できるわ。けれど、それはSSHが内密に進めている阻止計画なの」

レイシアの表情はいたって仕事モードであり、綾乃もまた、同様に真剣であった。

「ん？ 何何？」

飛芽がおつとりと摩訶不思議な植物を抱きながら顔を覗かせる。

「内密につて、どういことなの？」

飛芽が猫女と言埜の間から書類に視線を落としながらレイシアを見る。

「あくまでもこれは未然阻止することが前提なのよ。だからこれは公にはされていないわ。そしてこれを知るのはSPDAとSICOの本部局、それからウチだけみたいね」

レイシアの言葉に言埜たちが顔を見合わせる。

「なぜ、それをウチに？」

言埜が不思議そうに訊ねる。猫女、飛芽も同じ気持ちで頷く。アリスティック事務所は夜吹相談所に比べると所属するSPDSに優遇されている。それはそれだけの功績と規模をもつということで、力量から依頼があつたのだろうが、それがなぜここへ？ と夜吹相談所の面々は状況を把握していないようだ。

「本来ならウチで処理するものなの。でも、今のウチは手が回らなくて、委託することにしたのよ」

「本来なら優先して取り組まないといけないんですけど、裁判の続きが終わっているものが多くて、そちらを優先せざるを得なくて、同時進行が困難なんです」

二人の話に、若干言埜たちの表情は羨望を浮かばせるような眼差しを浮かべている。仕事で忙しいから、暇な夜吹へおこぼれをあげに来た、とも取れることではあるが、それ以上に忙しく働けることが羨ましいのだろう。三人が扉の向こうに消えた双剣に振り向き、ため息を漏らしていた。

「これは実行に移すかはまだ未定の計画なの。確定情報はそこに書いてあるわ。けれど、首謀者、その目的に関しては憶測でしかなく、今回はその調査と、仮に計画が動いている様子が見られれば、SICO本局へ通達し、組織の壊滅を図ることが目的なの」

レイシアの話を聞いてはいるが、言埜は書類に目をむけ、猫女は腑に落ちない様子を見せ、飛芽もそれが本当なのか疑っているようだ。

「何でウチに持ってくるんさあ？ あんたらならウチより優秀な事務所くらい知ってるはずさね？」

「ですよねえ。ウチはSPDSの中でも下の事務所ですよ〜？」
言うには悲しいが、業務功績が少ない以上、そのランクは必然的に下がってしまう。だからこそ、立地の問題はともあれ、評判がない以上、依頼は来ない。そしてランクが……と負のスパイラルの中に夜吹相談所がある。

猫女と飛芽が不思議なまなざしを向けると、レイシアが分かっているわ、と小さく息を漏らす。

「確かに、言埜は悪いけれど実績のある事務所は多いわよ」

夜吹相談所は決して優秀という箔がついているわけではない。仕事がない以上、最低限のランクを得ている程度。だからこそ、言埜たちも理解しているからこそ、のんびりしているし、双剣もまた、自由だ。

「けれどね、私の目から見て今回の事件に関しては隠密行動が基本

なのよ」

「猫女さんと飛芽さんの得意分野ですよ？」

綾乃も話しに混じり、その問いかけに猫女と飛芽の二人が顔を見合わせる。

「うーん、別に苦手じゃないけどお、疲れるよねえ」

「あたいは好きさあ。こう、じっくり、ねっとり、サクツと不意を撃つのは気持ちが良いもんさあ」

「やあん、猫女ちゃーんっ」

「こら、猫女。会議中なんだから、はしたないでしょ」

飛芽は別段嫌ではないが神経を使う分、疲労がいやらしいが、そういう飛芽に猫女が鋭い瞳を光らせ、かぶつと飛芽の耳に甘噛み付いた。くすぐったそうに身をよじる飛芽との二人のやり取りは、緊張感はなく、どこか姉妹のじゃれあいのように藹藹としている。それにやんわりと叱責をする言埜もまた、二人を見守っているようで職員という以上に、家族のような柔らかさがあつた。

「なんだか羨ましいですね」

綾乃がそんな二人に、羨望を見せる。それに猫女たちが小首を傾げる。

「それは逆つてもんじゃないかい？　ウチより業績良いわけだしさ？」

「だよねえ。私たち、いつお給金もらえるかも分からないんだよお？」

まだ戻つてこない双剣。いつまでウジウジしているのか、と猫女が視線を向ける

「所長があれば、今月も期待できないでしょうね」

言埜の呆れに、二人がうなずく。

「いえ、そうじゃなくてですね。何だか皆さん打ち溶け合っていて、良いなあって」

「仕事がない分、こういうことしかすることがありませんから」

綾乃の羨望も、言埜にしてみれば恥ずかしいことなのだろう。猫

女と飛芽は別段気にしていないようだが、諦めているようでもある。
「馴れ合いも良いけれど、仕事なんだから、綾乃。弁えるものは弁えることも大事なのよ？」

「分かってますよ、所長。ただ、私が就職した時は、こんな感じだったじゃないですか」

それはつまり、綾乃が就職した当時は、現在のように多忙を極めていなかったということ。レイシアもそれを思い出したようで、それ以上強く言うことはなかった。それ以上の発言は、夜吹相談所の現状を蔑む用に捕らえられてしまう可能性を示唆してか、ウチはウチ。夜吹相談所は夜吹相談所よ、と言葉を区切った。

「まあ、綾乃の入社した頃は、そっちも色々あったわけさね」

「ですよねえ。それがここまでになっちゃうんだもん。びっくりだよお」

「え？ どういうことですか？」

綾乃は急成長した理由を知らないようだが、猫女と飛芽は二人小さく笑った。それに疑問を浮かべてレイシアを見る綾乃だが、レイシアは気にすることじゃないわ、と詳細を口にはしなかった。

「言埜さん、どういうことなんでしょう？」

綾乃が言埜を見る。

「若気の至り、とでも言いましょうかね？」

「……そうね」

言埜が少し笑みを携えてレイシアを見る。だが、レイシアはその笑みに、少々表情を暗くして弱い贅意を見せるだけだった。

「ほーい、茶が入ったぞ」

少しだけ会話が途切れた間に、紅鬼がガイアと共に紅茶を入れた。きた。

「ありがとう、紅鬼君」

「おう。綾乃は砂糖三倍ので良かったんだよね？」

紅鬼が差し出すと、綾乃が笑顔でうなずき受け取る。

「どうぞ」

「ありがとう。もしかしてあなたが双剣の要請した新人かしら？」
レイシアに紅茶を出しだしたのはガイア。見かけぬ顔にレイシアが訊ねると、はいっ、とガイアが背筋を伸ばす。

「この度、夜吹相談所に就任した、ガイア・ドラクルです。担当は主に事務処理になると思いますが、よろしく願います」

緊張気味のガイアに綾乃とレイシアが軽く自己紹介と共に名刺を渡した。

「さて、話が脱線してるわ。ここからは少しまじめな話をするわ。双剣も呼んでもらえるかしら？」

レイシアが自分の事務所のように手を打ち、脱線した空気を締める。

「おいらが呼んでくる」

紅鬼が隣部屋へと駆けていくと、すぐに双剣が出てくる。

「いてて、お、おいっ、紅鬼っ、俺あ自分で歩けるっつーの」

ずりずりと紅鬼が双剣の首根っこを掴んで引きずってきた。

「嘘付け。所長、鏡の前ですすり泣いてたじゃねえかよ」

引きずられてきた双剣の頬には、若干の涙後が見えた。よほど髪を気にしているようで、深々とハットを被っていた。

「双剣、あなた室内でそうやって被るから蒸れるのよ？」

言埒と同じことを言うレイシアに、双剣が立ち上がる。そして、スーツの胸ポケットから取り出したタバコを咥え、開いた片手で横ポケットからライターを取り出した。

「レイシア、男にはな、守ってこそそのポリシーってもんがあるんだよ」

そして格好つけるようにライターをタバコへ近づけ着火した。
「どわっちいっ！」

その瞬間、炎柱が双剣の顔を襲うように燃え上がり、火をつけた双剣自身も驚きに仰け反った。

「馬鹿さねえ」

「最大火力主義ですもんねえ」

「オイルの無駄遣いですよ、所長」

猫女、飛芽、言埜の三人は見慣れているようで、あっちい、と気をつけてタバコに火をつけなおした双剣に呆れ顔を見せる。

「だ、大丈夫ですか？ 夜吹所長？」

綾乃は心配しているようではあるが、レイシアも猫女たち同様に呆れ顔を浮かべていた。

「所長、タオルです」

ガイアが濡れタオルを用意する。タバコを一吸いした双剣が顔を拭うようにタオルを当て、日と聞きつきながらタオルと取ると、双剣の表情が固まった。

「……」

様子を見ていた一同も、そんな双剣を見て、固まっていた。

「あ、ああ……っ」

タオルを持つ手が震え始める双剣。人差し指と中指で挟んでいるタバコも、プルプルと揺れている。そして、それを見つめるレイシア、綾乃はなんとも言えない寂しさを表現するようなまなざしを浮かべ、言埜の呆れたため息で、空気は一気に膨張した。

「うわあああつ！ 俺の髪があつ！？」

響き渡る双剣の叫び。このための沈黙は破られた。

「あゝあ、やつちまつたさあ」

猫女が双剣の顔が火柱の一瞬でかすかに変化したことに、小さく笑っていた。

「あららあゝ、所長の前髪、縮れてるよお？」

大丈夫うゝ？ と飛芽が双剣を覗き込むように小首を傾げる。

「下らないことをするから、そうなるんですよ」

言埜だけは冷静に言い放った。

「うおおおっ、前髪半端になくなっちゃってんじゃねえかよっ！」

自業自得ではあるが、まるで他人のせいのように言う。

「切りそろえるか、いっそのこと刈るかした方が良いわよ」

レイシアが言うと、飛芽がなにやらウネウネと動く奇妙な植物を

胸に抱える。ピンクドレスには不似合いな植物に、全員の視線が飛芽に集中する。

「お、おい、飛芽、そいつは、何だ……？」

植物にしては異様に動物性の動きを見せ、葉が刺々しい。茎にもバラの棘のようなものがちりばめられている。目の前でうごめくそれに、双剣は髪を押さえつつ、後ずさる。

「うわ、気持ち悪っ」

猫女がぶるつと身震いして言埜に抱きついた。

「うわぁ……そんな植物、あるんですね……」

綾乃は興味はあるようだが、近づきたくは無い、と、引いた目で見つめている。

「これはねえ、かに座55星から不法入国した子が持ってた種をねえ、育ててみたのお」

可愛いでしょぉ？ と飛芽が笑顔で言うが、賛同するものはいない。

「それ、モルビナの花よね？ 確か惑星間輸出条約規第七章三十二条に抵触してないかしら？」

「三十二条って、惑星間における独自動植物の輸出入の禁止についてですよ？」

ガイアが思い出すように言うと、レイシアがうなずく。

「そうね。それを育てることは、SSHの承認が必要のはずよ？」

いくらSPDSに所属しているとはいえ、飛芽の抱く植物は地球外生命体。植物という分類に所属していても、その様子からして危険視できる以上、地球への持込は禁則されている。「はいい。なので、これは被告人の所有物として、預かっているんですよ」

飛芽が許可は得ていないが、罪を犯し、服役中の被告が釈放、または国外追放処分の際に返還される所持物。それを管理するのは収監所や刑務所ではあるが、飛芽がそれを預かっているらしい。

「飛芽は植物のエキスパートでもありますから、万が一に対処する人材として特別許可を発行してもらっているんです」

言埜の補言に、レイシアが納得するように首を振る。

「で、それでなにをしようとしているわけ？」

「こうするんですよ」

植物に関しては、飛芽には秀でた能力があり、レイシアもそれを知っているようで、それ以上のことは聞かなかった。

「ちよつ！ 飛芽、おまつ、や、やめつ……」

飛芽が双剣に歩み寄り、につこりと笑顔を浮かべる。

「所長、大丈夫ですよ。すぐに終わりますからねえ」

うなうねと蠢くモルビナの花が双剣の目の前に差し出される。双剣は脅える子犬のように言埜と猫女に飛芽を止めるように訴える。

「こ、言埜つ、猫女つ、飛芽を止めろつ」

「平気ですよ。救急搬送に比べれば軽いものでしょうから」

「そうさねえ。ばつさり切つてもらうが良いさあ」

伝説とされる食事番の飛芽。飛芽の機嫌を損ねると、食事が危険。それは、飛芽がポイズンプラントファクターである以上、毒を混入することは容易い。だからこそ、双剣は恐れ、言埜と猫女は何も言わない。

「お、お前らつ、自分ばつかわ可愛がつてんじゃねえよつ」

「所長の方が自分可愛がつてんじゃん。禿げてんのにさ」

紅鬼が後ずさる双剣の背中を抑える。

「ちよつ、おま、は、離せつてのつ」

「飛芽、さつさとやつちゃえ」

「はあゝい。モルビナちゃん、さくつとやつちゃつてえ」

飛芽の言葉に、モルビナの花が活発に葉を揺らし、動き出す。それはそれは植物の様態ではない。むしろ、異種生命体と表記される宇宙人のようなものである。

「やつ、やめつ！ おうわあああ——つ！」

もじやもじやと蠢くモルビナと、楽しげな飛芽。見て見ぬふりの言埜と猫女に、うわあ……と、口を押さえて様子を見る綾乃とレイシア。よく意味を理解していないようなガイアの面々が見守る中、

双剣の悲鳴だけが相談所には響いていた。

「はあゝい、完了」

だが、その時間はずいぶんとあっさりと終わった。ひらりはらりと舞い落ちるのは、もじやもじやに焦げた髪。そして飛芽がモルビナを落ち着かせるように茎を撫でる。すると、うねっていた様態が静まっていく。

「おやおや、見事にばっさりいつてやったさねえ」

「あら、本当に」

双剣は恐怖に固まったままだが、足元には、双剣が大事にしていた髪が散っていた。

「いっちょあがりって感じだな」

「夜吹所長、大丈夫ですか？」

ガイアだけが心配しているが、他は誰一人として気にもかけない。「あの、夜吹所長、鏡、見ます？」

綾乃が席を立ち、小さな鏡を差し出すと、恐る恐る双剣が受け取り、眼前に晒す。

「な、何じゃこりやあああつ！」

そして、まるで決まり文句のように、双剣の叫びがまた響いた。

「うおお……な、なんじゃこりやあ……」

双剣は震える手で、モルビナが切り裂いた髪の後手に手を触れ、表情は凍り付いていた。

「アフロで前髪切りそろえてると、アホみたいさなあ」

猫女が率直な意見を言うのと、いくつか笑いをこらえていたのに、我慢を超えたように、小さく噴出す笑いが漏れる。

「ぶっ、た、確かに間抜けに見えないこともないですね……っ」

言埜も口元を隠してはいるが、頬が上がり、笑っているのが分かる。

「モルビナはねえ、茎と葉っぱに細かい棘の毛が密集しているからあ、勢い良く動かすと電動ノコギリみたいに切っちゃうんだよあ」
飛芽は相変わらずのん気にモルビナを解説し、双剣を見て、ばっ

さりだよな？ と全員に切れ味を確認させた。

「ぶっはははっ！ ダッセツ！ 所長、超格好悪いっ！」

あははは、と紅鬼は大爆笑。双剣の表情がその笑い声に合わせるように沈んでいく。

「こ、紅鬼君、だ、ダメですよ。所長は気にしてることなんですか」

ガイアが紅鬼の肩を抱いて小声で呟き首を振る。他人から見るとそれは、双剣の髪がもう元には戻らないと言っているように見えなくもない。

「よ、夜吹所長……あまり気にしなくても、帽子被れば、だ、大丈夫ですよ？」

綾乃が一応フォローを入れるが、声が震えている以上、説得力はない。

「それくらい気にする必要ないでしょ。愛嬌が出て良いじゃない」

だが、全員の笑いを冷却するような一言が、レイシアの口から漏れた。レイシアであれば、卑下するであろうと思っていた一同と、何も知らないガイアは、意外な表情でレイシアを見た。

「な、何よ？」

レイシアが集める視線に声を向ける。

「まあ、あんたはそうさね」

「そうですね」

「だよねえ。恋は盲目って言うもんねえ。どんなにぶさいくでも格好良いんだろうねえ」

「所長ですから、そちらも、うちも」

猫女、言埜、飛芽、綾乃は事情を知るだけに、怪訝なレイシアにどこか微笑ましそう煮帰すばかり。紅鬼とガイアはそんなことよりやはり双剣に視線が向き。からかう紅鬼とそれを止めるガイアという図式が完成していた。

「わ、私はそんなことよりも、早くこの話を進めたいだけよっ。ほら、双剣、あなたも早く座りなさいよっ。これは緊急を要するSS

Hの勅令なのよ」

そんな視線に気づいているのか、レイシアが席を立ち、無理やり双剣の首根っこを掴み、いすに座らせた。

「ちよつ、ま、待てつ、俺は今、それどころじゃ……っ」

髪を隠しながら双剣はレイシアに強制的に座らされ、話題を逸らすべくなのか、レイシアは猫女が持っていた書類を取り上げ、近くに置かれていたミニボードを引つ張り出し、異種生命体による無差別侵攻計画の未然措置、と殴り書きのようにペンを走らせ、全員に強制的に話題の転換を見せつけた。

e p . 2 久々の仕事も・・・？（後書き）

閲覧ありがとうございました。

今回は、「明日のキミへ」を更新します。

更新予定日は、6月30日前後にさせていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2971f/>

とある事務所のテトテテン（仮題）

2010年10月11日00時29分発行